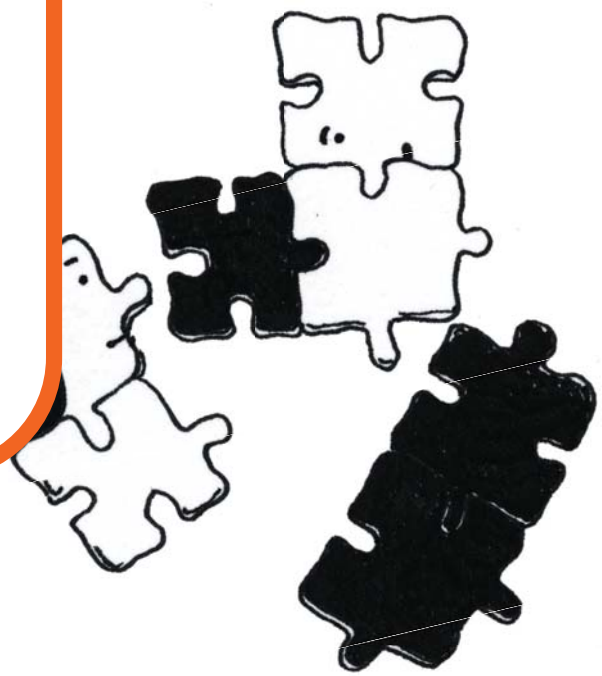
福島県男女共生センター広報誌

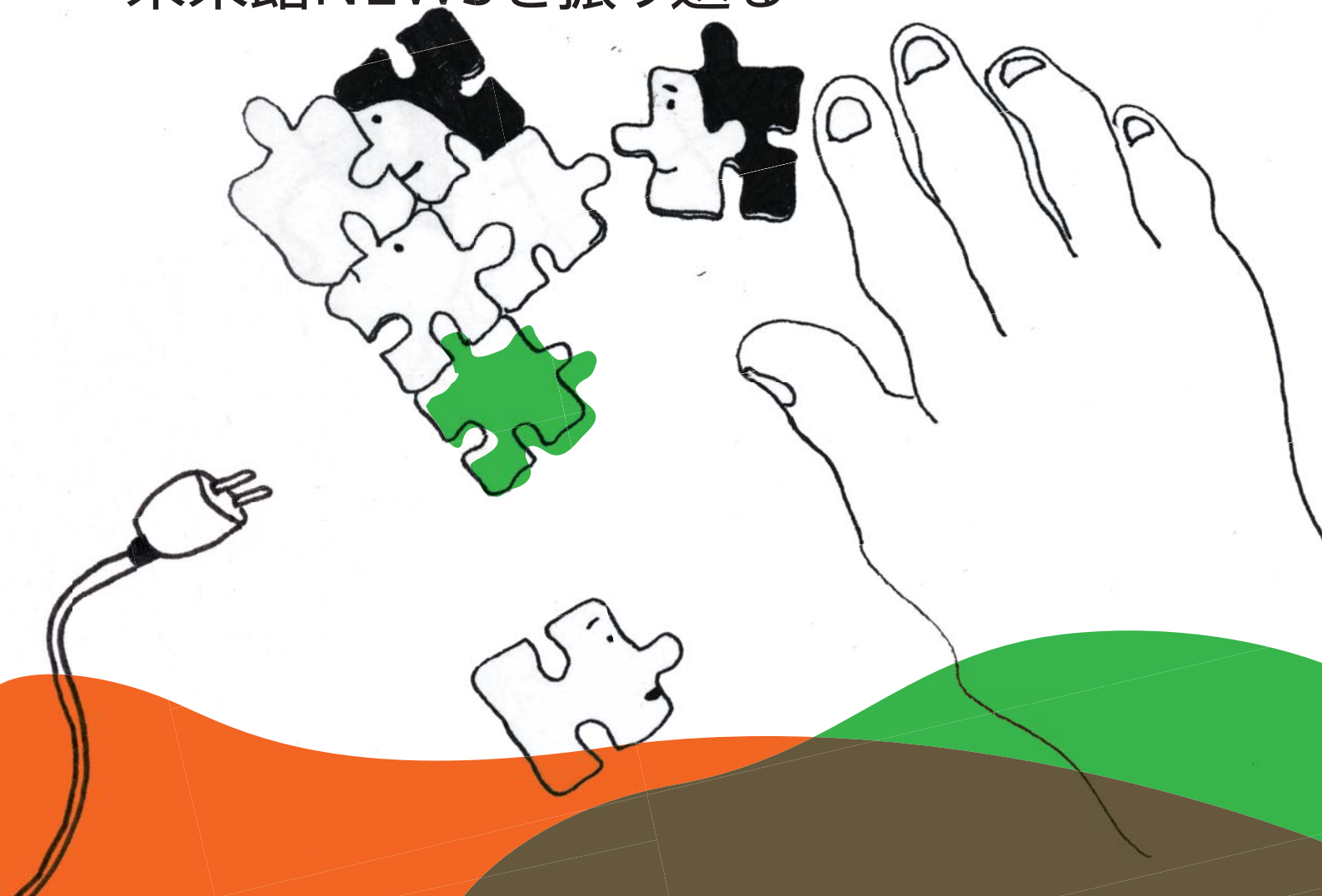
未来館NEWS

vol.
38
2010.1



特集

開館10年目に突入!
未来館NEWSを振り返る



開館10年目に突入！ 未来館NEWSを振り返る

平成13年1月18日にオープンした福島県男女共生センター「女と男の未来館」は、平成23年1月に開館10周年を迎えます。
これに先駆け、本年1月に開館10年目に突入した未来館のこれまでを皆様にも振り返っていただくため、
「未来館NEWS」の歴史をたどってみたいと思います。
これまで本誌では、男女共同参画社会の実現に向け、当センターが企画・実施をした様々な事業や
研究等について記事を掲載してきました。その中から、特に思い出深い記事等を振り返っていきます。

特集1 対談

下村満子館長と各界の著名人の方々との対談を、
各人の発言等のダイジェストで振り返ります。
（注：文中の役職名等は掲載当時のものですので、ご了承ください。）

創刊号 2001年1月発行

●ジャーナリスト
筑紫 哲也 さん × 下村 館長

創刊号

創刊記念特別対談
「女と男の21世紀」

【対談内容】
21世紀の女と男の「生き方」や「関係性」のよりよい未来像と、男女のネットワークの場としての「女と男の未来館」の在り方などについて語り合いました。

筑紫「男は非常に世間体に縛られているんですよ。」「日本の社会は男は元気がなくて女は元気だとよく言うでしょう、その差は、世間体という他律的なものに縛られているかどうかの差じゃないかと思うんですね。」

下村「女性がいっぱい外に出て行くことによって、組織とか社会の成り立ちを女性化しちゃうっていうか、もうちょっとリラックスして、子どもを生みながら仕事もできるっていうほうへもっていくことかなと思うんです。」

● ● ● ● ●

筑紫「男と女の関係を職場からも社会からもあらゆる面でどう捉えたらいいのか、そこのほぐしをやっていく場としては意味があるんじゃないかと思いますね。一方的に行政が女のためにっていうんじゃなくて、女と男をどうやってつなぐか、一緒に考えていこうという場を作るのは一番おもしろいし、意味があるし、これからの時代にふさわしいんじゃないですかね。」

下村「未来館というのは、21世紀の男性の生き方、女性の生き方を追求する一つの場の提供であって、私たちもいろいろプログラムを作りますが、あとはもう皆さん方がどう使っていただくかだと思います。」

第5号
2002年3月発行

●参議院議員・国際政治学者
舛添 要一 さん × 下村 館長

第5号

男女共生センター1周年記念 未来館フェスティバル
記念トーク&トーク
「21世紀の国際社会の動向と男女共同参画社会」

【対談内容】

誰もが多様な生き方を選択できる時代の到来。誰もが自分らしくいきいきと暮らせる社会のあり方とゆとりを持つことの必要性などについて語り合いました。

下村「21世紀というのは、これまでのように家事育児や老人介護は女性、外で働くのは男性という、この役割分業を、もうちょっと柔軟にし、両方が家事育児もし、老人の介護にも男性が参加する姿というのがやはり健全な姿ではないでしょうか。」

舛添「私に構造改革をやれといわれたら、二つの大きなことをやります。一つは、人生80年時代の人生設計にあわせて全部の社会システムを組み替えること。」「もう一つは、東京だけに任せないで地方でもやるということ、つまり、中央と地方の関係を基本的に見直すということです。」

● ● ● ● ●

舛添「女性も障がい者も高齢者も若者も、みんな同じですけど、自分がこうやりたいということをいきいきとできる。それが、国の制度とか、政治が作った制度で邪魔されないということ。それにつきると思います。」「自分たちがゆとりを持てば、豊かなこころになれると思います。そして、この社会生活において失いがちな人間性を取り戻すことができるのではないでしょうか。」

第10号
2003年6月発行

●内閣府男女共同参画局局長
坂東 眞理子 さん × 下村 館長

第10号

「未来館NEWS」第10号記念特別企画
記念対談
「男女共同参画社会が拓く未来」

【対談内容】

男女共同参画社会の実現が、日本社会の活性化や男性の人生価値発見につながる理由と、その実現に必要な取り組みなどについて語り合いました。

下村「男たるもの女たるものこうあるべきだという性別役割分担意識のような『よろい』を一度脱いで、自分らしく生きるために、男女共同参画社会は必要だと思うのです。」

坂東「今、日本は、新しい発想が入り込む余地がなくなっている。そこに新しい発想を吹き込むとしたら、女性をはじめとする、今までの日本でメインじゃなかった人たちなのではないでしょうか。」「女性のためだけではなく、今の日本社会を活性化する上で、男女共同参画という切り口が必要なんですよ。」

● ● ● ● ●

坂東「男女共同参画社会が男性にも必要だと言っているのは、お金のことや職場の中での出世などだけではなく、人生にはいろいろな追求する価値があるということを知ってもらいたいからなんです。」

第24号
2006年12月発行

●元外務大臣・参議院議員
川口 より子 さん × 下村 館長

第24号

未来館フェスティバル「大参画祭」
記念対談
「涙は女の武器じゃない」

【対談内容】

仕事と結婚の両立を実現させてきた二人のこれまでの歩みと出会い、女性の政治参加の必要性や若い世代の女性たちへ伝えたいことなどについて語り合いました。

川口「男性と女性は経験も違うし視点も違う。私は、違う意見が党の中で、あるいは国会の中で議論されなければ物事の半分しか政策に反映されないと思います。スウェーデン、ノルウェーでは、国会議員の半分は女性です。少子化対策、仕事と生活のバランス、短時間正社員制などは、より女性の方がそのニーズを感じているわけです。そこは女性が大きな声を出していかなければいけないところだと思いますし、そういう意味ではもっと女性議員が増えた方がいい。」

下村「女性は、家庭を持ったり子育てをしたりするところで足踏みをするというところもあると思いますが、遊びの精神だったりちょっと横道にそれたりというような部分、人を泳がせるようなところが少ない。・・・それは能力がない訳ではなく、経験だと思うのですが。」

川口「女性は自信のなさというのがあると思います。自分で世界を小さく作っていて、本当はまわりから見ればもっと能力があるのに、自信がない。」「家庭でも社会生活でも女性が一歩引いてまわりの緩衝剤になるようなそういう生き方がいいとされてきて、まわりもそれを期待し、子どもの時からそう育てられてきているということもあるでしょうね。」

第26・27合併号
2007年6月発行

●フリージャーナリスト
田原 総一朗 さん × 下村 館長

第26/27号

男女共生講演会
対談
「女性が日本をどう変える？」

【対談内容】

日本の今とこれからについて国際問題、政治、経済等様々な観点から見すえ、今後の企業の在り方や働き方、女性の政治参加の必要性までを幅広く語り合いました。

田原「（敗戦後）国民すべてが、少しでも豊かに生きたい、いつの日か欧米に追いつきたい、そのことが一つの目標でした。それが、80年代中頃にほぼ到達して・・・今は新しい次の目標が作られていない状態にあります。それをどう作るかが問題です。今まで、より豊かな社会を求めて男性中心でやってきましたが、これからは女性が新しい動きを作らなければならない。」

下村「世の中に男と女が半数ずついる以上、どちらが上か下かではなくて、女性と男性の両方の感性をバランスよくもって、それを反映させた行政、政治が行われるべきだと思います。」

田原「昔の企業の正社員としての条件は、転勤が可能で、朝から夕方までの8時間拘束、残業ができること、経理や営業など配属先を問わない、終身雇用で会社に一生を投じる、この5つでした。この条件を満たすことができたのは男性です。ですからこれまでは、会社の経営も男性中心でした。しかし、産業構造が変わったことにより、重要になってきたのは企画力です。そうすると、今申し上げた5つの条件が、会社としては必ずしも必須の条件ではなくなってきているのですが、そういう状況の変化に気付いていない企業もまだまだ沢山あります。」

第29号
2007年11月発行

●株式会社ダイエー取締役副会長

林　文子 さん × 下村 館長

第29号

未来館フェスティバルシンボルイベント
対談

「仕事を通じて人生を学ぶ」

【対談内容】

少子高齢化、経済の低迷、雇用環境の悪化など問題が山積する現代において、自分らしく働くこと・生きることの素晴らしさについて語り合いました。

林　「スーパーマーケットのお客様は8割が女性なのですが、まだ男性だけで商品企画をすることが多い。そこに女性の視点を入れたらとても売れたということで、男性達は、『そうか。自分たちだけでやっていてはだめなのだな』と気がついたのです。」

下村「多様な選択肢がそろっている社会こそが豊かな社会なのです。それには、様々な決定の場に女性を入れることです。女性は消費者としてのみ存在するのではなく、生産者、あるいは企画者、あるいは商品開発者として意思決定の場に参画してこそ、男女共同参画社会として、より豊かに日本の経済も発展していくのだ思います。」

林　「男女雇用機会均等法が施行されて二十数年が経ちます。均等法世代の方たちが育ち、今、40代になりました。この方たちが企業で活躍し始めています。」「あと5年、10年するとさらに決定の場に女性が増えるでしょう。これからは男性と女性が対等な関係で強みを生かしあって、弱みを補完し合うようなスタイルが、日本中で広がっていくのではないかと思います。」

下村「女性と男性が協力しあいながら1+1を3や5にしていくことが本当の意味で男女共同参画と言えるのではないでしょうか。男女平等とは、男と女がイコールになることではなく、一人の尊厳ある人間として対等に、お互いの多様性を生かして協力し合いましょうということです。」

第30号
2008年2月発行

●精神科医

香山 リカ さん × 下村 館長

第30号

男女共生講演会
対談

「生きづらい世の中を、自分らしく楽しく生きる」

【対談内容】

ストレス過多社会となった現代、精神科医として香山さんが関わった様々な方々の生き方から、この豊かな時代をどう生きるかについて語り合いました。

香山「今の時代は、仕事を持ちたいという女性に、仕事を辞めなさいと言うこともなく、逆に、何でもやっていいんだよという自由が、制度的には男女雇用機会均等法などで与えられています。今は権利のために闘うことも少ない。むしろそういったことが弱い面を作っているのではないかと。」

香山「今は本当に聞いてくれる人もいないし、あるいは、人に言ってしまったらそういう目で見られてしまうという気持ちから、言える場所がないんです。」

下村「コロンビア大学教授マリアン・レガトさんの『すぐに忘れる男 決して忘れない女』という本の中には、女性の最大のストレス解消は、女友達と長電話をしたりすることで、それはとても大事なことだと書いてあります。ところが、女性と比べて男性は、自分の恥や、家庭で妻とけんかした話など口が裂けても他人には言いません。」「言うこと自体は解決にはならないけれど、言うことがストレスを軽くしてくれるのです。ですから、男性も女性も声に出すということを大いにやるべきですよね。」

第33号
2008年10月発行

●俳優
愛川 欽也 さん × 下村 館長

第33号

男女共生講演会
対談
映画「いつも二人」上映&トーク

【対談内容】
映画「いつも二人」にこめた「優しさを伝えたい」という想いと、尊敬する周囲の人たちの生き方を通じた、いきいきと生きることの重要性について語り合いました。

愛川「人生をコツコツ生きていて、ヒーローでも偉い人でもない、そういうやつを僕は映画で撮りたいし、芝居でもやりたい。」「そういう人間を描くことで、優しさを伝えたいというのが僕のテーマです。」
下村「そういう人って人間としてすごく愛おしいですよね。そういう部分をほとんどの人が持っていて、悩んだり迷ったりしながら生きている。」「人間の本質は善であり、ささやかな優しさを大事にしなければなりませんよね。」

愛川「昔風に、男が家に帰ってきたらかみさんがいて、『まずお風呂にしますか』とかなんとかっていう家庭は味わったことがない。だけど、そのことで男が努力したり嘆くほどのものじゃないですよね。」「昔から『亭主は元気で留守がいい』という言葉がありますけれども『女房も元気で留守がいい』。

第37号
2009年10月発行

●精神科医・映画監督
和田 秀樹 さん × 下村 館長

第37号

未来館フェスティバルシンボルイベント
対談
映画「受験のシンデレラ」上映&トーク

【対談内容】
映画「受験のシンデレラ」に込められた"緩和ケア"や"格差社会"などのテーマと、ポジティブに人生を生きることの必要性などについて語り合いました。

和田「東大に入ったからといって幸せになれるかどうかは僕にもわかりません。」「学歴があるからといって成功できるとは限りませんが、人生の選択肢は広がると思います。」

下村「完全に治すことだけが、がんの治療だと思われがちですが、患者さんの残りの命を充実させるお手伝いも医者の仕事です。」「どういう死に方がいいのかというのは、治療法も含めて個人が選択すべきだと思います。」
和田「本当のことを言うと、がんで余命を宣告するべきではないと思います。余命より、残りの時間をどれだけ充実させるか、クオリティ・オブ・ライフが重要だからです。」

特集●2 「未来館NEWS」のこれまで

2001年1月発行の創刊号から昨年10月に発行した37号まで、これまで36冊の「未来館NEWS」を発行しました。この特集では、記念号や、未来館の記念行事に関する特集記事を中心に、「未来館NEWS」の節目にあたる特集を振り返ります。

（注：文中の役職名等は掲載当時のものですので、ご了承ください。）

創刊号
2001年1月発行

未来館の誕生にあたり、ジャーナリストの有馬真喜子さんをはじめ女性問題等の第一線で活躍される方々から熱いメッセージが寄せられました。

女と男の未来館へのメッセージ

第5号
2002年3月発行

開館1周年を記念して2002年1月19日、20日に開催された「未来館フェスティバル」の模様を特集しました。参議院議員・舛添要一さんと下村館長の記念対談（特集1・P2参照）のほか、ワークショップやイベントをはじめ、県民の方々が企画・実施した「県民参加企画」などを紹介しました。

「あっ感じる 新しい風」

第2号
2001年7月発行

2001年1月18日から3日間にわたり開催された未来館オープニングイベントの模様について特集しました。

東京家政大学教授・樋口恵子さんによる「女と男のこれから～女性2000年会議からみえるもの」と題した記念講演や、大阪女子大学教授・船橋邦子さん、佐藤栄佐久福島県知事、下村館長が「男女共生センターのこれから」について話し合った記念トークの模様を紹介しました。

男女共生センターのこれから

第10号
2003年6月発行

第10号記念特別企画として、内閣府男女共同参画局長・板東眞理子さんと下村館長の記念対談（特集1・P2参照）のほか、2003年5月25日に「男女が創る豊かな未来」と題して行われた板東さんの講演の模様を特集しました。

また、開館2周年にあたり、平成15年3月1日から5日間にわたって開催された「未来館フェスティバル」の内容も紹介しました。

「男女が創る豊かな未来」

■男女共同参画社会はどのような社会なのか

■一人ひとりのチャレンジが必要

第20号
2005年8月発行

第20号記念企画として、下村館長の「今あらためて男女共同参画社会を考える」と題したメッセージや、竹川佳寿子理事長の「わたしの想う『男女共同参画社会』」と題したメッセージを掲載しました。

特集

「今あらためて男女共同参画社会を考える」

第23号
2006年4月発行

開館5周年を記念して2006年2月5日に開催された「男女共生サミットトップからの熱烈アピールー」の模様を特集しました。

第１部の基調講演は、内閣府特命担当大臣(少子化・男女共同参画)・猪口邦子さんから「『社会的性別』(ジェンダー)の正確な理解と男女共同参画社会の形成に向けて」と題したお話を、第２部は堂本暁子千葉県知事、片山善博鳥取県知事、佐藤栄佐久福島県知事のリレーメッセージを、第３部のパネルディスカッションでは、３人の知事と名取はにわ内閣府男女共同参画局長、下村館長が「男女共同参画の歩みを着実に」をテーマとした話し合いを行いました。

福島県男女共生センター「女と男の未来館」5周年記念事業

「男女共生ふくしまサミット」

―トップからの熱烈アピール―

第25号
2007年1月発行

この号から「チャレンジする女性」をテーマに、男女共生社会の形成に向けて女性のキャリアを実現していくため、様々な立場で活躍する女性の方々を紹介しています。

本号の宇佐見香織さんをはじめ、これまで8人の女性と1つの団体を紹介しました。

チャレンジする女性
Challenge Woman

第30号
2008年2月発行

2007年10月31日に開催した男女共生講演会において、精神科医・香山リカさんが「生きづらい世の中を、自分らしく楽しく生きる」と題し講演を行った模様と、香山さんと下村館長の対談（特集1・P4参照）を特集しました。

特集 男女共生講演会
「生きづらい世の中を、自分らしく楽しく生きる」
第一部 講演
香山 リカ（かやま りか）さん

第34号
2009年1月発行

2008年9月6日、7日に開催された第9回「未来館フェスティバル」の模様について特集しました。

「仕事を持った女性たち、中でも長くキャリアを積んできたリーダー的立場の女性同士が、お互いに助け合うネットワークを作ろう」という趣旨で下村館長を含むメンバーが呼びかけ人となり、設立された「リーダーシップ111（ワンワンワン）」の皆さん14名による「みんなで語ろう！21世紀の歩き方」と題したトークイベントのほか、様々なイベントや県民参加企画の内容を紹介しました。

未来館フェスティバル「大参画祭」シンボルイベント
みんなで語ろう！
「21世紀の人生の歩き方」

男の介護 シリーズ1

Man who looks after

少子高齢化の進行する現代では、年齢や男女に関係なく、誰もが家族を介護する立場になる可能性があります。そこで、現在増えつつある男性の介護について、シリーズで特集します。
第1回は、妻の介護をしながら、「認知症の人と家族の会」福島県支部副会長として認知症の家族を介護する方々のケア活動を積極的に行っている大内唯雄さんにお話を伺いました。

「私の介護」

大内（おおうち） 唯雄（ただお） さん

▶認知症とはどのような病気なのでしょうか

医学的な難しいことは分かりませんが、記憶力の低下や実行機能障害などの症状があります。一般の方や認知症の専門医以外の医師には、「認知症」がまだよく理解されていないこともあるようで、様子がおかしかったり、物忘れなどがあっても、鬱病や高齢のせいなどと誤った判断がなされる場合もあるようです。

今は、薬で認知症の進行を遅らせることができるのですが、私が知っている範囲でも、専門医が近くにいない、相談が恥ずかしいなどの理由からきちんとした診察を受けずに、病状が進んでしまってから相談に来る方が多く、こういった状況を本当に残念に思っています。

▶お連れ合いの方が認知症だと思われたきっかけは

はじめに気づいたのは、妻が郵便物や電話、来客のあったことなどを忘れたり、おかしなことを言ったりすることでした。その頃はまだ年のせいだろうとか、妻の身内や友だちが近くにいないので寂しいせいだろうなどと思う程度でした。

その後、認知症という病気のことをまわりの方に聞いて、妻の症状は認知症なのだと確信しました。

▶大内さんが、お連れ合いの方の病気を周囲に打ち明けた上で、ご自身で介護をしようと思われた理由は

介護は辛くて、汚くて、大変というイメージがありましたが、妻は家族の一員ですし、今まで寂しい思いもさせてきました。病気になってからは一層不安そうな状態でしたので、自分が介護をすれば妻に不安を与えずにすむのではと考え、すぐに会社を退きました。

しかし、妻がアルツハイマーだと診断を受けた直後は、自分自身も戸惑いや葛藤がありました。

近所の人に妻の病気を知られるのが恥ずかしく、散歩に行きたがる妻を連れてわざわざ遠くまでドライブしたり、買い物も人目を気にしながら急いで済ませたりしてたくさん失敗もしましたが、なんとか自分で面倒をみようと苦心しました。

そういった生活が何年か続くうち、自分が病気になってしまい、はじめてこれではいけないと気付きました。その頃には、妻を介護していることを近所の人も薄々気付いて、言葉をかけてくれるようになり、隠しておくとか、弱みを見せないとかにこだわることはないと思い、近所の方々にも妻の病気のことを打ち明けました。

それからは随分気が楽になりました。近所の方も注意して妻を見守ってくれ、言葉をかけてくれたりするようになり、今ではもう少し早く打ち明けていればよかったと思っています。

▶介護をしてみて生活の変化はありましたか

家事をするようになったこともありますが、まず、生活環境がガラリと変わりました。行動が制限され、自由時間がなくなりました。人間関係も大きく変わり、社会参加も難しい。介護する前には考えられなかったような大きな制約があります。

▶では、介護におけるやりがいはなんですか

やはり「ありがとう」と言われるのが一番うれしいです。

「呆けても心は生きている」と言われますし、自分でも、介護に勝る治療はないといつも思っています。

妻は私を一番信頼してくれていますので、私も妻の信頼を得られるよう一生懸命介護をしています。そうしていると、一日一回ぐらい妻が私に向かって「ありがとう」と言ってくれます。本人は無意識に言っているのかもしれませんが、私にとってはすごくインパクトのある言葉なんで、勇気が出ます。だから、ありがとうと言われると、私は“もっと面倒をみてあげなくちゃならないな”と思うのです。

▶では、介護をする上で、大切なことは

認知症は治らない病気なので、本人らしく生きることができるよう、悔いのないように介護することだと思っています。

以前は、何気なく「情けない」などと言って、妻を不安にさせ、傷つけていたこともありましたが、今では、言ってはいけない言葉を「介護でのタブー語」として大きな紙に書いて家の中に貼り、忠実

【プロフィール】

昭和15年 安達郡本宮町（現本宮市）生まれ。

神奈川県での会社勤務を経て、本宮市に戻り、会社を経営するが、平成13年、妻がアルツハイマー型認知症を発症したことを機に会社を退き、介護に専念。

「福島県介護予防市町村支援委員会」委員、「認知症高齢者の在宅ケアに関する調査に係る調査表作成検討会」メンバーをはじめとし、「認知症の人と家族の会」福島県支部副会長、福島県本宮市の認知症家族会「なごみ会」副会長、福島県「男の介護の会」会長。

現在は、妻と2人暮らし。

大内（おおうち） 唯雄（ただお） さん

Man who looks after

に守っています。本人を不安にさせ、傷つけるような言葉は、言われた者も言った者も決して良い気持ちはしないものです。それに、妻は自分が認知症であることを否定していましたが、今は、認知症であることも、認知症という言葉もわかっていません。できないことをさせようとしても、反発され口論になるだけなので、病気のせいだからと自分が我慢するしかありませんし、本人のしたいようにさせることが必要なことだと思っています。

▶本宮市の認知症家族会「なごみ会」や「認知症の人と家族の会」福島県支部に入会されたきっかけは

市役所の知人に介護の方法や介護に関する制度のことを相談した際に、認知症の人を介護している方たちの集まりである本宮市の認知症家族会「なごみ会」を紹介されました。

「なごみ会」では地域包括支援センターの方なども参加していて様々な相談ができましたし、同じような悩みを抱えている方がたくさんいて、お互いの悩みや介護に関する情報を話したりして、大変なのは自分ひとりではないと感じることができ、気持ちが軽くなりました。

そこで「認知症の人と家族の会」福島県支部（以下「家族会」とします。）を知り参加しました。こちらは組織も大きく、ケアマネージャーや介護士、専門医などの専門の資格を持つ方など、いろいろな立場の方がいて、より専門的なアドバイスを受けることができました。

悩みや、問題が起きた場合には、なごみ会や家族会に相談すると、経験や知識が豊富な方が助言をしてくれるので、非常に助かりますし、介護者同士の交流はとても安心できます。

▶こうした会の活動を積極的にされる理由は

会に相談に来る方には、自分が得た知識や経験の範囲内で相談に乗って悩みを解消してあげたいと思っています。その結果、相談者の方の悩みが軽くなり、明るい顔になれば、活動をしていてよかったと感じます。

また、介護をしていると自分の時間がなくなり、好きだった旅行もできず、自分の癒しの時間もとれなくなりましたが、会に参加して仲間と交流し、自分の胸の内を打ちあけたり、いろいろな話をすることが、今は一番の癒しになっています。

▶男性と女性の介護には違いがありますか

最近は、自分の母親や妻を心配して、家族の会へ相談に来る男性や、認知症に関心を持つ男性も増えてきています。会へ相談に来る方は、ある程度自分が介護をすることを覚悟されているようです。

私も、これまで妻の介護を夢中でしてきましたが、男性と女性の介護の違いについてはあまり考えたことはありません。違いはあまりないのではないでしょうか。

男性の方が弱みをみせたくないという気持ちが強いかもしれないので、近所や地域の人などに相談することにとまどいを感じることがあるかもしれませんが、男性だからとか、家事や家のことを全くしてこなかったから介護ができないということはないですね。必要なのは「自分が介護をする」と覚悟を決めることだと思います。

▶現在介護している男性、これから介護する可能性のある男性にアドバイスをお願いします

認知症は今はまだ治らない病気です。また、認知症の介護はいつまで続くのか、いつ終わるのかが分からない介護です。認知症かもしれないと思ったなら、なるべく早く相談したり診察を受けたりすること、近所や地域の方々にも協力してもらうことが必要です。

「終わりのない介護だからこそ頑張らない介護」とも言われていますので、無理をしない介護が大切だと思います。

そして、他人に任せられないのであれば、自分が介護をすることを覚悟して、自分が介護を受ける人のことを一番分かるように努力しなければならないでしょう。また、認知症のことを分かっているのといないのでは、介護の仕方も全く違ってくると思うので、認知症のことについても勉強が必要です。

▶今後の目標は

まだまだ認知症が知られていないので、悩んでいる人や困っている人がいたら、自分の介護の体験を生かして相談に乗ってあげて、介護する方を楽にしてあげたいです。また、家族会としては、もっと認知症のことを知ってもらうために、県内に活動の場を広げていきたいと思っています。

ーありがとうございましたー

未来館誕生10年記念事業

第1弾 未来館国際シンポジウム

世界の“大使が語る、日本の今”

～もっと知ろう世界のこと、日本のこと～

トルコ共和国

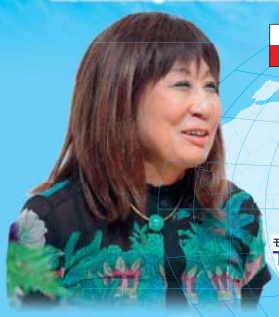
特命全権大使
セリム・セルメット・アタジャンル 閣下
His Excellency Mr. Selim Sermet Atacanli

ポーランド共和国

特命全権大使
ヤドヴィガ・ロドヴィッチ 閣下
Her Excellency Dr. Jadwiga Rodowicz

ベトナム社会主義共和国

特命全権大使
グエン・フー・ビン 閣下
His Excellency Mr. NGUYEN Phu Binh



モデレーター
下村満子 館長

日時 2月27日(土) 平成22年
13時40分～17時

会場 福島県男女共生センター
「女と男の未来館」研修ホール

主催：(財)福島県青少年育成・男女共生推進機構福島県男女共生センター
共催：福島県、二本松市
後援：独立行政法人国際協力機構二本松青年海外協力隊訓練所、福島県教育委員会、財団法人福島県国際交流協会、福島県女性団体連絡協議会、福島県社会福祉協議会、福島民報社、福島民友新聞社、朝日新聞福島総局、毎日新聞福島支局、読売新聞東京本社福島支局、産経新聞福島支局、河北新報社、日本経済新聞社福島支局、時事通信社福島支局、共同通信社福島支局、NHK福島放送局、福島テレビ、福島中央テレビ、福島放送、株式会社テレビユー福島、株式会社ラジオ福島、ふくしまFM

第2弾

おんなって何?おとこって何?

日時 3月13日(土) 13時00分～17時00分 予定
会場 福島県男女共生センター

長谷川 眞理子 氏 講演
(総合研究大学大学院 先導科学研究科 教授)
オスとメスー性の不思議について。

山田 昌弘 氏 講演
(中央大学 文学部 教授)
「婚活」などの流行語をキーワードとして現代社会を読み解く。

第3弾

未来館プレミアム夢ステージ「スワンシスターズ&ボーイズ スペシャルトーク&コンサート」

日時 3月14日(日) 13時00分～17時00分 予定
会場 福島ビューホテル(JR福島駅西口)

第4弾

下村満子館長講演&異論、反論、何でもあり。とことん話そう大討論会

日時 3月22日(月) 12時00分～17時00分 予定
会場 福島県男女共生センター

未来館誕生10年記念表彰式

福島県男女共生センター広報誌

未来館NEWS

“自分らしさ”を生かした未来へ

vol. 38 2010.1

■編集・発行 「未来館NEWS」
(財)福島県青少年育成・男女共生推進機構 福島県男女共生センター～女と男の未来館～
〒964-0904 福島県二本松市郭内一丁目196-1
TEL(0243)23-8301(代) FAX(0243)23-8312
ホームページアドレス http://www.f-miraikan.or.jp
メールアドレス mirai@f-miraikan.or.jp

PRINTED WITH SOY INK
この広報誌は、環境にやさしい大豆インキを使用しています。